

道徳的実践意欲の育成をめざす道徳科授業づくり

～パッケージ型ユニットの考え方を活用して～

教職実践基礎領域
木下 晋治

はじめに

「道徳は読むことばかりでつまらないから好きじゃない。」昨年度の実習時にその言葉を聞いて、大学院で学んだ道徳授業の大切さと学校現場の違いを実感したことが本研究の出発点である。

その思いを基に、連携協力校の小学校で1年半のサポーター活動、教師力向上実習を通して、どうすれば普段の授業で児童が「学んだことを生かしてみたい、何かいいことをしてみたい」と思える道徳授業づくりになるのかを追究したものである。本稿ではその授業実践の成果と課題について報告する。

1 主題・副題設定の理由

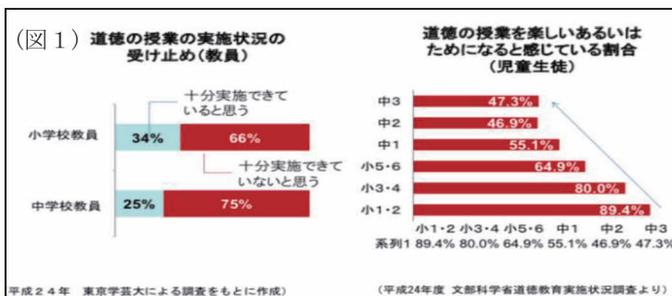
1-1 社会背景と道徳教育の在り方

小学校では、平成30年度から、中学校では平成31年度から「特別の教科 道徳」が始まり道徳が教科となった。教科化された背景として、文部科学省は次の5点を挙げている。

- ①深刻ないじめの本質的な問題解決に向けて
- ②情報通信技術の発展と子供の生活
- ③子供をとりまく地域や家庭の変化
- ④諸外国に比べて低い、高校生の自己肯定感や社会参画への意識
- ⑤与えられた正解のない社会状況

これらの課題に対して、児童生徒がよりよく生きていくためには、道徳的価値を基に他者と関わり合いながら道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育て道徳性を養うことが重要であると考えられる。

1-2 道徳授業の現状



実際の教育現場では、教師自身が道徳の授業を十分に行えていないと感じており、児童生徒も学年が上がるにつれて道徳の授業を楽しんでいる割合も低下している現状がある。(図1)

この現状は、教師が教材研究や授業をどう立案していけばいいのか分からず、登場人物の心情を読み取るだけの授業で終わってしまっている可能性を示唆している。こうした授業では、児童生徒は道徳に対して主体的に取り組み自分事として考えることができていないだろう。

このような状況では、いくらいじめ問題の教材を扱い、いじめはいけないことだ、思いやりをもちましようと言われても道徳的価値についての認識の深まりや変化がなく、道徳的な判断力、心情、実践意欲や態度は身に付かないと考える。これらの現状を踏まえ、本題を設定した。

1-3 道徳的実践意欲の重要性

(ア) 道徳的実践意欲の定義

道徳的実践意欲について文部科学省は学習指導要領の中で以下のように述べている。

道徳的実践意欲は、道徳的判断力や道徳的心情を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働きである。

つまり道徳的実践意欲は、道徳的判断力と道徳的心情を基にした、自分や他者のために何かいいことをしてみたいという意欲のことである。しかし、毎週1時間の授業の中で、道徳的心情や判断力は培われても、その学びが実践意欲や態度に結びついていくのは難しい。現に、道徳が教科化された背景としていじめ問題があるが、認知件数に減少する様子は見られない。これは、いじめはいけないことだと授業を通して考えても、止めに入る勇気がでない、同調圧力によって見て見ぬふりをしてしまうなど、学びが実践意欲や態度につながっていないからだと考えられる。

以上のことから、道徳的実践意欲を高めることが重要である。そのために、児童の中にある道徳的価値への認識をゆさぶり、変容を促していくことが有効だと考える。

(イ) 道徳的実践意欲の重要性について

『小学校学習指導要領解説特別の教科道徳』(以下解説)において、道徳科の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多角的・多面的に考え自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育

てる」と記されている。

また、道徳的実践力について、解説 30・31 頁では「人間としてよりよく生きていく力であり、一人一人の児童が道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、将来出会うであろう様々な場面、状況においても、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質を意味している。それは、主として、道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を包括するものである」と書かれている。

この解説から、道徳の授業を受けて「何かいいことをやってみたい」「何かできるようにになりたい」という意欲を高め続ける事が実践力に結びついていくのではないかと考える。一人ひとりが道徳的価値に対して理解しても、行動に移してみようとするまでに道徳的価値に対する認識が高まっていないことが考えられる。また、正しい道徳的価値については知っていても、なかなか実現に移すことの出来ない人間の弱さも考えていく必要があると考える。

2 研究構想

2-1 児童の実態<目指す児童像>

犬山市の小学校の第4学年の児童を中心に研究を進めた。その中で、清掃への取り組み方では教師が指示しなくても細かい部分まで取り組む姿があった。一方で、友達に任せて自分の好きな事をしている児童もあり、行動に差がみられることもあった。

そこで、道徳科の授業で「清掃」に関する実践を行った。その後の児童の清掃では、より細かい部分まで清掃に取り組む姿が見られたが、それも一部の児童で継続して行うことはできていなかった。

その原因として以下のことが考えられる。それは、1時間完了の授業だけで清掃に対する認識を変えるのは難しく、多角的な視点で清掃する意味を考えたりする必要はあるということだ。自分ももっと清掃に対して真剣に取り組んでみたいという意欲や、どうしてもやってみたいという十分な思いをもてていないために、上記のような課題が生まれるのだと考える。

このような実態を踏まえて、以下のように目指す児童像を設定した。

<目指す児童像>

道徳の授業で学んだことを生かし、自分も他者もよりよく生きてみたいと思える児童

2-2 実践意欲を高める方法

道徳的実践意欲を高める手立てとして田沼茂紀氏の提唱する道徳科における「パッケージ型ユニット」に着目した。

① 定義

田沼(2017)は一定のテーマに基づいた小単元プログラムを「パッケージ型ユニット」と称し、子ども一

人一人の道徳的課題意識を最大限に引き出す学習プログラムを提供することができるとしている。

大まかに3つの視点をもって取り組むことで、今までの道徳授業の質を上げることができるとしている。

- (1) 年間 35 時間の道徳科授業を大単元、つまりユニット (unit) として捉える。
- (2) 学期ごと、節目ごとに事項の道徳の実態や道徳教育重点目標に照らして重点的指導内容を明らかにする。
- (3) 年間指導計画に小単元プログラム (パッケージ型ユニット) を組み込む。

本研究では(3)の部分に着目し実践を行っていく。さらに、パッケージ型ユニットを考える際に、ユニットの構成には3つのパターンがあるとしている。

- パターン①【テーマに即して同一的価値を複数回ユニットとしてくむ】
- パターン②【テーマに即して異なる価値内容を組み合わせる複数時間ユニットとしてくむ】
- パターン③【中心となるテーマを、ほかの価値内容で補強してユニットをくむ】

これらは道徳の授業すべてをパッケージ型ユニットとするのではなく、年間の中のいくつかに組み込むことで、具体的、実効性のある道徳科の授業が可能になっていく。つまり、学校の実態や学級の子どもの実態に合った道徳教育が可能となり、子ども中心の授業を実現することにつながっていくのである。

② 定義の考察

②-1 パッケージ型ユニットを組みさらに効果が高まる方法はないのか。

道徳科授業における最終的な目標は、「正しい道徳的価値を理解し実践に移す道徳的実践力」を身につけることであるとする。その道徳的実践力について田沼(2017)は「認知的側面・情意的側面・行動的側面が一人ひとりの子どもの内面において調和的に形成される必要がある。いくら道徳的価値を知っていたとしてもその道徳的価値を実現しようとする実践力や「どうしても、そうせざるにはいけない」といった心情的な思いが伴っていかないといけない。」とまとめている。行動に移したいと思えば行動に移すためには、児童の中で大きな決断が必要な場合がある。そのためには、1時間の授業の中で児童の中に認識の変容が促され、授業の学びを実感する必要がある。

しかし、児童にとっての道徳は「読んで終わりだからきらい」「考えることがない」といった認識が多い。いくら、パッケージ型ユニットを組んで授業を行ってもすでに答えの分かりきっている授業では、認識の変容は促せず、パッケージ型ユニットを組む効果も薄くなってしまわないかと考える。

そこで、1 時間の授業においても児童の中に新たな認識が生まれ、既存の道徳的価値について深まりが生まれる授業が必要であると考えます。

②-2 年間 35 時間という時間による物理的限界がある。

田沼(2017)は「道徳科授業は年間 35 時間の設定で、いくらユニットと称しても 2～4 時間程度の複数時間でのパッケージとして年間指導計画にいくつか組み込むことができない物理的限界がある」と述べている。このことから、週 1 時間の授業でパッケージを組み立てて授業を行ったとしても、実践意欲や実践力という面で十分に児童の中に高まりがみられるのかという疑問が生まれた。

そこで、鈴木(2018)の提唱する「小さな道徳授業」を手立てとして活用していく。

朝の会や帰りの会でのちょっとした時間で授業を行うことで、新たな認識が生まれたりし、年間 35 時間の中で足りない部分を補うことができると考える。さらに、ユニットの 1 時間ごとのつながりを意識した教材を扱うことで問題意識の持続や向上に効果が生まれるのではないかと予想する。

上記のパッケージ型ユニットの考え方とその批判を踏まえて、以下のように研究仮説を立てる。

2-3 研究の仮説

道徳科授業の中で、道徳的価値において以下の 2 つに工夫を施すことで、道徳的実践意欲を高めることができるであろう。

- ①パッケージ型ユニットを構成し、1 時間ごとの授業で認識の深まりを促し、問題意識を持続させれば、道徳的実践意欲の高まりが見られるだろう。
- ②さらに、授業同士を「小さな道徳」「学級通信」でつなぐことで、授業での学びを実生活に生かしてみようと思う児童が育つだろう。

2-4 仮説に迫るための手立て

(ア)パッケージの構成の工夫

①ユニットの構成方法

パッケージを組み、授業後にどのような認識や姿がみられるようにしたいのかを明確にし構成をしていく。

①児童の実態の把握

キーワードの決定

②パッケージ終了後の児童の認識の把握

どのような認識や行動が望ましいのか明確にする

③パターンの決定

3つのパターンから選択する

④内容項目・教材の選定

学習指導要領を参考に、教科書・ポスター等から選択する

⑤教材の組み合わせ方の決定（小さな道徳とも）

授業同士に関連性をもたせ、小さな道徳とも関連させる

⑥教材研究

②小さな道徳授業

鈴木(2018)の提唱する「小さな道徳授業」とは、10～15 分でできるちょっとした道徳授業のことである。そこで、ユニットの構成の一部として 1 時間の授業ごとの間に実践を行い、道徳価値への問題意識の継続や新たな道徳的価値への認識をもたせられるようにしていく。

③学級通信

学級通信は、担任、児童と保護者をつなぐものであり、普段の学級の様子や教師の伝えたいことを提示していくなどの活用ができる。児童の日々の様子を載せることで、児童が自身の成長を実感する場面となるよう活用する。授業実践を通して感じたことを伝える場面、意見を全体に共有する場面、伝えきれなかった部分を伝えることを主に活用していく。そうすることで、1 時間の授業同士のつながりや、長期で道徳的価値について考える場面を与えることができると考える。

(イ) 1 時間ごとの授業の工夫

①教材ならではのねらいの設定

授業づくりでは、必ず、ねらい(本時の目標)を設定する。道徳科のねらいの設定について赤堀(2010)は「1 時間の授業において、その時間に教師が指導を意図する一定の道徳的価値と、養うべき道徳性の様相を示したである」と述べている。

つまり、ねらいを設定する際に、この 1 時間で授業後にこのような考えをもってもらいたい、このような姿をみたいというゴールの児童像をもっておくことがねらいの設定につながっていく。そのために「その教材ならではのねらい」を設定する必要がある。

鈴木(2018)は「その教材ならではのねらい」を設定する際に「授業で活用しようとしている教材が、内容項目のどんな側面を描いているのかを考える」ことが大切だと述べている。『小学校道徳 光村図書 4 年』にある教材『『思いやり』って』と『思いやりのかたち』は同じ思いやりの内容項目を扱っているが、教材から学べる道徳的価値は違う。つまり、教師は教材にどのような「思いやり」が描かれているのかを読み取り、そこからねらいを立てる必要がある。それが「その教材ならではのねらい」の設定の方法である。

②教材の構造化

教科書教材はいくつもの構成要素で成り立っている。

写真、イラスト、文章、見出し、図など様々なもので構成されている。この構成要素がどのような意図があり、使われているのか捉えることで、教材研究が深い物になっていく。

鈴木(2016)は教科書研究の基本は以下の3つのステップであるとしている。

- (1) 構成要素に分ける (できるだけ細分化)
- (2) 構成要素を意味付ける (なぜ?で考える)
- (3) 構成要素を関連付ける (どの部分が関連するの

教材の中にある構成要素をどのように活用するかを考えることで、教材を深く読み込むことになり、授業づくりにもつながっていく。

③思考を刺激する発問

発問をつくる際に「思考を刺激する発問」になっているかを意識して発問を作っていく。答えの分かりきっている発問を児童にぶつけても、本音を引き出すことは難しい。人間の心の弱さを実感でき、考えてみたいと思える発問になのかを吟味し発問をつくる。

④身近な問題と結びつける発問

授業を通して、道徳的価値への理解が深まったり、広がったりしても、教材内で完結してしまい自分事として考えられないことがある。意図的に自分の生活や見の回りの様子と結びつけて考えてさせることで、学びが実生活と結びつけて考えることにつながっていく。実生活と結びつけて考えられるように、「この学級ではどうか」「自分には何ができるのか」と投げかけることで、より具体的に考えられるようにしていく。さらに、実際の子どもの姿や関連する資料の例を紹介していく。

⑤教材との出会わせ方の工夫

導入部分で児童に本時の授業に関する問題意識や疑問をもたせることで、「はやく教科書を読んでみたい」「このことについて考えてみたい」と思わせることで、授業前後での認識に変容を促すことができると考える。具体的には、教科書の挿絵や資料のイラストなど教材を構成している要素に着目して導入で提示していく。

2-5 検証方法

①アンケートの分析

実習Ⅱでは「いじめ」実習Ⅲでは「挑戦」に関する、認識の変容や実践意欲の向上を探るアンケートを作成した。アンケートは各実習で行い、以下の3つの変化を図るためにアンケートを実施した。

- [1] 実習Ⅱ・Ⅲを通しての道徳的実践意欲の変化
- [2] 「いじめ」に対する道徳的実践意欲の変化
- [3] 「挑戦」に対する道徳的実践意欲の変化

②ワークシートの記述分析

毎回の授業でワークシートを作成し感想、やってみようこと等を書いた。その中で、授業を通して児童の認識の変容や実践意欲に結びつく記述内容を分析して

いく。田村の作成した、「学習プリントの記述を活用した評価基準表」を基に分析シートを作成した。

●ワークシート記述分析(表1)

段階	内容
1	道徳的価値が含まれていないもの。新たな知識を得たことや意見交換の大切さなどについて書いている。
2	教材の中での著者の意見にふれているが、道徳的価値を自分自身の事として捉えていない。
3	道徳的価値について自分自身の事と結び付け、考えたり考察したりしている。
4	道徳的価値について深く考え、その価値に対して自分を見つめ、さらに自分の人生の中でその道徳的価値に迫っていこうとする(実践していこうとする)意欲の記述がある。

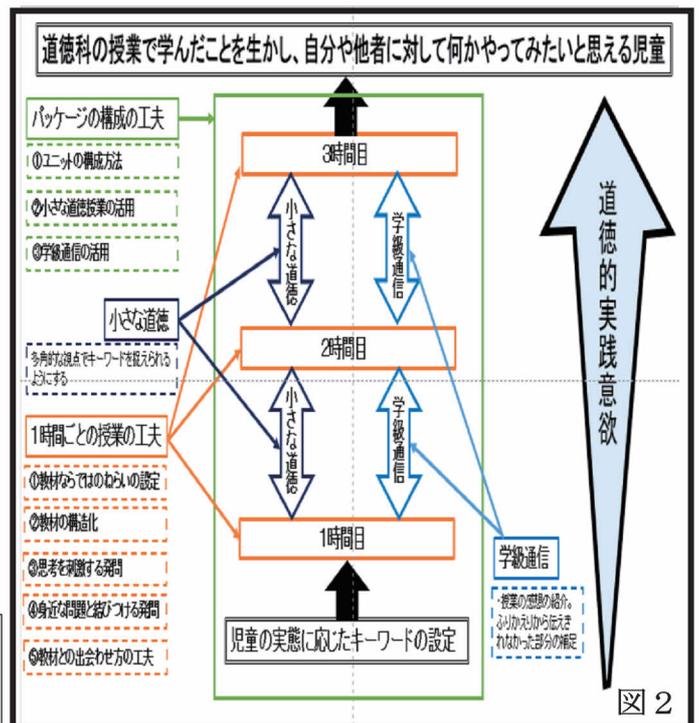
ここから、段階4の記述が見られる割合や授業内での認識の変容などから、なぜその意欲が表れたのかを考察していく。

③担当教員や協議会での言葉分析

分析に自己の主観だけでなく、客観性をもたせるために、授業を見ていただいた教授や担任の先生の講評から分析を行う。

2-6 研究構想図

以上の手立てを踏まえて研究構想図を図2で示した。



右側の矢印は、「パッケージの構成の工夫」と「1時間ごとの授業の工夫」を手立てとした場合、授業を重ねると同時に道徳的実践意欲も高まっていくことを示している。

3 教師力向上実習Ⅱでの実践

対象：愛知県公立小学校 第4学年
 期間：令和2年8月31日～9月14日

3-1 キーワードについて

教師力向上実習Ⅱでは「いじめ」をキーワードに実践を行った。その理由として、3つの要因を挙げる。

① 予防教育の視点

実習校では、いじめが認識されている様子はない。しかし、いつ起きてもおかしくないのがいじめである。起こる前に予防教育を行うことが必要である。

(関連教材：実践①・小さな道徳①②)

② コロナでの教育の変化

コロナの影響で他者と関わる機会が学校教育全体で減少している。友達との関わり方にも今後変化が生じる恐れがあるのでいじめに対する認識をもたせることが必要である。

(関連教材：実践②)

③ 支援の必要な児童の存在

学級の中に他者と関わること、気持ちを理解する事が苦手な児童が在籍している。今後、その児童が高学年になるにあたり周りからどのように見られるのか心配である。児童に対する不満をもつ児童も存在する。

(関連教材：実践②・小さな道徳①②)

3-2 内容項目・教材の組み合わせ方について

栗原(2013)は「クラスの一人ひとりがいじめ加害者にならないようにすることが、いじめのないクラスをつくるための近道である」と述べている。そこで、加害者側にならない意識をもたせる構成を意識した。

● 内容項目について

第1時【公正、公平、社会正義】…いじめは決してあってはならないことである。誰に対しても分け隔てをせず、相手を大切にしようとする認識をもつ。

小さな道徳①【親切、思いやり】…人間の怖い、優しい部分を知り、いじめをなくすには、思いやりが必要であるという認識を持つ。

第2時【よりよい学校生活、集団生活の充実】…自分達の学級でいじめが起きないようにできることを考える。

小さな道徳②【親切、思いやり】…困っている人がいた時に、微笑みだけでも人を助けられる認識をもつ。

● 教材の組み合わせ方について

教材の組み合わせは、ユニット終了後の児童像から適切な物を選定した。

まず、「いじめは決して許されるものではなく、いじりなど軽い気持ちでもいじめになる」という認識をもてるように、「いじりといじめ」を扱った。「人間」では自分の怖い面がいじりやいじめの原因になるとつなげ優しい面を出すことが思いやりの行動になると認識をもたせた。そして、「いじめを止めるのは怖い」が勇気をもって止めてみたい」という認識をもてるように「ひとりぼっちのYちゃん」を扱った。同調圧力などの人間の心の弱さと向き合い、自分にできること

を考えることで、実践意欲に結び付けられるようにした。その後の「優しさをつなげよう」では、思いやりをもって接し、いじめをなくす強い思いをもてるようにつなげた。

これらの視点を踏まえて以下のようなパッケージ型ユニットを構成し実践を行った。

3-3 パッケージ型ユニットの全体像 (図3)

● 実践前の児童のいじめに対する認識の予想

- ・ いじめはいけないことだと分かっているが「何がいじめなのか」という具体的な認識は薄い。
- ・ 自分が冗談でやっていた行為も「いじめ」につながってしまう認識は薄い。

① 教材名 『いじり・それはいじめです』

・ 出典(くまもと子どもの人権テーブル「いじめポスター」
 佐藤香苗 2014年3月)

・ 内容項目【公正、公平、社会正義】

自作教材

☆教材ならではのねらい

人への一方的な「いじり」が「いじめ」につながることを知り、自分がされて嫌なことは「いじめ」だという認識を持ち、友達との接し方に注意しようとする意識を高める。

小さな道徳①

教材名 『人間』

出典(愛知県人権啓発ポスター)

内容項目【親切、思いやり】

学級通信

② 教材名 『ひとりぼっちのYちゃん』

・ 出典(光村図書4年)

・ 内容項目【よりよい学校生活、集団生活の充実】

☆教材ならではのねらい

自分の感情やなにげない行動が友達を傷付けてしまい、いじめにつながることに気付き、どのようにいじめが広まるのか、どうしたらいじめがひどくならず済むのかを考えることで、いじめのないクラスにしようとする意識を高める。

小さな道徳②

教材名 『やさしさを広げよう』

主典(千葉県人権啓発ポスター)

・ 内容項目【親切、思いやり】

学級通信

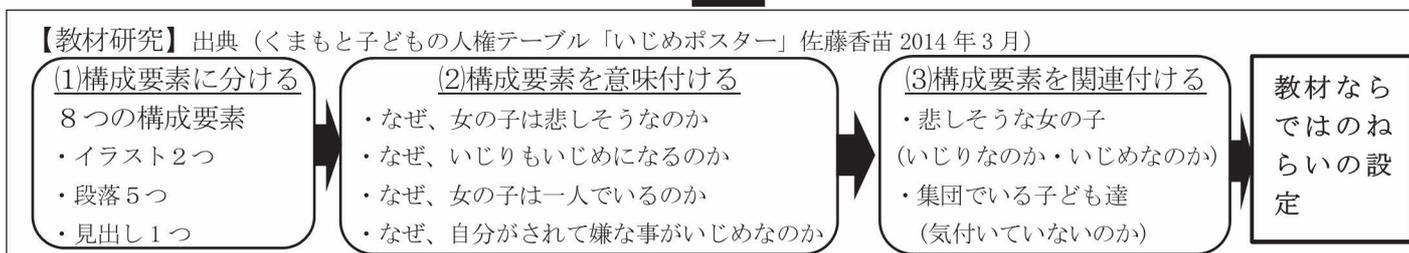
● 実践後の児童のいじめに対する認識の予想

- ・ いじめは決して許されるものではない。いじめとは相手が嫌な気持ちになってしまう言葉や行動をしてしまう事をさす。
- ・ いじめを止めるのは怖い、いじめなどを見たら勇気をもって止めに行きたい。

3-4 検証授業1「いじり・・・それはいじめです」

(1) 教材研究と主な授業の流れ

	教材の提示	主な発問と児童の反応	教師の意図
導入	文字をすべて隠してイラストのみで提示。 手立て(イ)-⑤	①何か気付いた事、考えた事がありますか？ ◎女の子が一人にいる。悲しそうな子がいる。	教材に対する興味をもたせる。
	(いじり)・・・それはいじめです ()を隠して提示。	①()には何が入ると思いますか？ ◎仲間外れ・悪口・からかい	児童のいじめの認識を確認し、ズレを感じさせる。
展開	「いじられキャラそんな人はいません」を提示。 手立て(イ)-③	①あなたは「いじり・・・それはいじめ」に賛成できますか？反対ですか？ 1.反対 2 どちらかという 反対3 どちらかという 賛成 4 賛成	仲よし同士のいじり・笑いのあるいじりはいいのかで切り返し、話し合い後立場をもう一度確認し、認識の変容を自覚できるようにする。
	「あなたがされて嫌なことはいじめです。」を提示。 手立て(イ)-④	①あなたの身近なのは、「いじり」「いじめ」どちらですか？どうすればなくなるでしょう。 ◎いじり ◎自分のいやなことは人にもしない。	いじめは分かりやすいがいじりは気付かぬうちにやっつけてしまっていること、自分が嫌なことはいじめになることを認識する。
		①今日のふりかえりを書きましょう。 ①教師のいじめの経験を話す。	授業を通して何を学んだのかどう生かしていきたいのか振り返る。



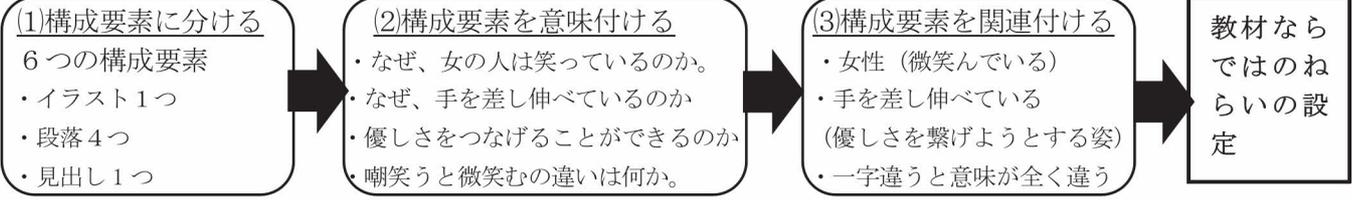
(2) 手立てと授業の実際

手立て(エ) 教材との出会わせ方の工夫 「いじり・・・それはいじめです」の(いじり)の部分空欄にして提示 いじりが入ること知り、なぜいじりがいじめになるのかという問題意識をもつことができた。
手立て(ウ)-1 思考を刺激する発問 「いじり・・・それはいじめです」に賛成か反対かを4段階で考える。 教師は反対派として、「仲よし同士のいじりは?」「笑いのあるいじりは?」と切り返し、相手が嫌がっていたらいじめになることに気付いた児童もいた。
手立て(ウ)-2 身近な問題と結びつける発問 いじりが必要なかどうか考え、どうすればなくなるのかを考えた。具体的にいじりがどのような場面で見られるのかを出すことで、自分のやっつけていることがいじりである認識をもつ児童の姿も見られた。

3-5 検証授業2 小さな道徳「やさしさをつなげよう」 教材研究と主な授業の流れ

	教材の提示	主な発問と児童の反応	教師の意図
導入	文字をすべて隠してイラスト(女性)のみを提示 手立て(イ)-⑤	①何か気付いた事、考えた事がありますか？ ◎手を差し伸べている。笑顔の女性がいる。 ①この女性は誰に手を差し伸べているのでしょうか？ ◎友達、知り合い	・教材に対する興味をもたせる。 ・児童の意見から問題意識をもたせられるようにする。
展開	文章の「なりたいのは、人を嘲笑う人ですか。人に微笑む人ですか。」を提示。 手立て(イ)-③	①あなたは、どちらになりたいと思いましたか？ ◎微笑む人。 ①近くの人に微笑んでみましょう。 ①誰に、どんな時に微笑んであげたいですか？ ◎困っている友達、失敗した人に。	・嘲笑う、微笑むの意味を確認し、どんな場面を想定しているのか考える。 ・具体的にイメージできるようにする。
まとめ	「やさしさをつなげよう」を提示。 手立て(イ)-④	①最後に「やさしさをつなげよう」と書いてあります。今日一日優しさをつなげるとはどんなことなのか意識して生活してみてください。	・一日を過ごす中で、小さな道徳が意識できるよう疑問をもたせて終わるようにする。

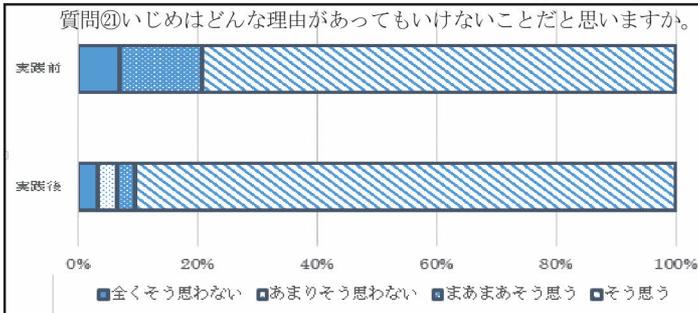
【教材研究】 出典（千葉県人権啓発ポスター平成21年9月）



3-6 実践の成果と考察

(1) 実践前後のアンケート結果の比較

質問②に対して、児童の割合が実践前は79.3%であったのに対し、実践後では90.6%にまで増加した。



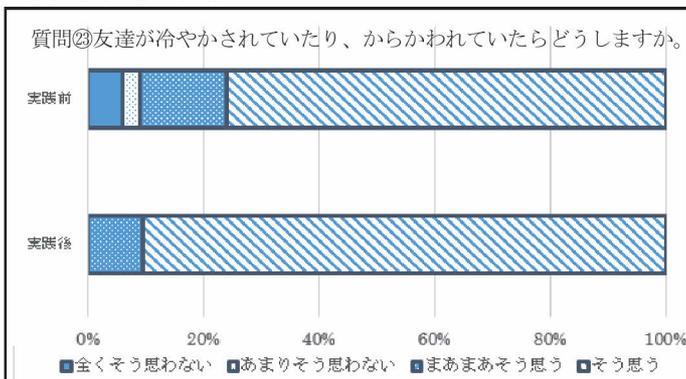
さらに、実践前では「まあまあそう思う」と答えた児童の記述を見ると、いじめられていたらやり返してしまうという葛藤が感じられる内容があった。

22 21で答えた理由を書いてください
いじめはいけないと分かっていけれど前にもいじめられていたらやり返してしまうと持ちも分かるから

実践後には、「全くそう思わない」に変わっていた。やり返してしまうかもしれないという葛藤からどんな理由があってもいじめはいけないことだという認識の変容が見られた。記述からも自分がされて嫌なことはいじめになるという授業での認識が含まれており効果があったのではないかとと言える。

22 21で答えた理由を書いてください
もし自分がされたらいやな気持ちになるから

また、実践②の感想では、「いじめを止めるのにも勇気がある」「いじめは絶対に許さない、止めたい」という記述が多く見られ、道徳的実践意欲の高まりも見られるようになった。



質問③に対して、実践前では、止めに入るなどの意欲がみられる児童の割合は71.4%だったのに対し、実践後では90.4%にまで増加した。いじめに対する認識が深まり自分にも何かできることをやってみようという意思の表れがみられた。

23 友達が冷やかされていたり、からかわれていたら、あなたはどうしますか。
(当てはまるもの○をつけてください)
①「やめなよ」などと、からかっている人に注意する
②あまり関わらない
③自分からは言わないけど、つい言葉がでてくることある
④遊んでいるだけならいっしょにからかうこともある
なかなかな声か
出せない

記述の中には、いじめを止めに入ることに對してためらいを感じている児童がいた。実践後には、「注意する」に○を付けており、実践②でいじめを止めに入るには勇気があることを認識できたと考える。

(2) 毎時間のワークシート記述分析

分析シートを基に、道徳的実践意欲がどのように1時間ごとに変化していったのか分析した。(表1参考)

	4段階	3段階	2段階	1段階
実践①	3人	7人	12人	8人
実践②	7人	9人	10人	5人

実践①では「もっといじめの事について勉強したい」「やっぱりいじめはしてはいけないんだなと思いました。他の友達の意見を聞いてもっとやってはいけないことが分かった。」との記述があった。この段階では実践意欲よりも、いじめについての認識を確認できたという記述内容が多くあった。

実践②では「いじめられている子がもしいたらちょっと注意するのは怖いけどやってみよう」との記述があった。止めるのは怖いという認識を自覚しながらも止めてみたいという意欲が書かれている。

パッケージを組みいじめについて考えを重ねることで、いじめを見た時に何か自分もしてみたいと考える児童が増加していることが分かる。

3-7 課題

いじめについて考える中で、いじめはどんな理由があってもいけないという認識をもつことはできたが、同調圧力などの人間の心の弱さに焦点を当てる事ができておらず、具体的にどのようないじめやいじりを減らすことができるのかを考えることができていなかった。児童の本音を引き出すためにも、発言に対し自分がこれまでにいじめを経験していないのかなどをふりかえり掘り下げていくことが必要であった。

4 教師力向上実習Ⅲでの実践

対象：愛知県立公立小学校 第4学年
期間：令和2年9月16日～10月9日

4-1 キーワードについて

教師力向上実習Ⅲでは、「挑戦」をキーワードに実践を行った。その理由として、3つの要因を挙げる。

①授業中の様子から

授業で自分の考えに自信がないと挙手できない児童の様子が見られた。

(関連教材：小さな道徳②・実践③)

②学級力アンケートの問題意識から

これまでに行っている2回の学級力アンケートでは、挑戦の項目が2回とも自己評価が低い状況であった。

(関連教材：実践①・小さな道徳①②)

③自己肯定感の向上に向けて

僕、私には無理という言葉をよく聞くことがあった。

(関連教材：実践②・小さな道徳②)

4-2 内容項目・教材の組み合わせ方について

●内容項目について

第1時【希望と勇気、努力と強い意志】…言葉と日付を関連させ、自分の目標に向けて努力しようとする。

小さな道徳①【よりよい学校生活、集団生活の充実】…自分達のトイレの現状から、使う人のために自分に何ができるのか考え行動することで、自分で考え行動する大切さを実感する。

第2時【個性の伸長】…自分に自信をもてるように、自分だけの特徴を知り、それを生かしてみようとする認識をもつ。

小さな道徳②【希望と勇気、努力と強い意志】…「カッコよく生きる」の言葉をもとに、自分でやろうと決めたことに対して努力する認識をもつ。

第3時【希望と勇気、努力と強い意志】…谷さんの生き方を通して、目標や夢を叶えるためには強い思いをもって努力する大切さに気付く。

●教材の組み合わせ方について

まず、「目標をもって何か実際に取り組み、成功体験の喜びを感じている姿」に対して、第1時で運動会と関連付けて実践を行う。さらに、小さな道徳でトイレについて扱い自分にもできる事に取り組み、誰かの役に立てたという実感をもてるように、教材を組み合わせた。次に「自分にも人より優れている部分があることに気付くそれを伸ばそうとしている姿」が見られるように、第2時では個性について考え、自分だけの持ち味を見つけそれを生かしていきたいと認識をもてるようにする。この「自分だけの持ち味」は第3時の谷さんの「自分も持っている大切なもの」と関連付けられる。小さな道徳の「カッコよく生きてみないか」はカッコよく生きている谷さんの生き方と関連させることができる考えた。

4-3 パッケージ構成と児童の認識の変容

●実践前の児童の挑戦に対する認識の予想

- ・失敗してしまうのが怖い。挑戦することは大きな勇気がいり、「失敗したらどうしよう」という感情から行動に移せない。
- ・友達と自分を比較し、自分のできない事や苦手な部分を見てしまい自分に自信がない。

① 教材名 『日付とコトバ』

- ・出典 (日本新聞協会 PR サイト、青木一也著)
- ・内容項目【希望と勇気、努力と強い意志】

自作教材

☆教材ならではのねらい

自分達の身の回りのコトバに日付を付けることで心に残る特別な意味に変わり、日付とコトバの関係に気付きその日を目標にして、自分で何か取り組んでみようとする意識を高める。

小さな道徳①

教材『トイレもきれいって言われたい』

- ・出典 (花王トイレマナー張り紙)
- ・内容項目【よりよい学校生活、集団生活の充実】

学級通信

② 教材名 『みんなちがって、みんないい』

- ・出典 (光村図書4年)
- ・内容項目【個性の伸長】

☆教材ならではのねらい

「みんなちがって、みんないい」の言葉から、自分や周りの友達にも必ず長所や短所があり、それぞれの違いを通して、自分だけの持ち味である事に気付き、周りと比較せずもつと自分だけの持ち味を伸ばしていこうとする意識を高める。

小さな道徳②

教材名『カッコよく生きてみないか』

- ・出典 (斉藤孝 (2004)『斉藤孝のガツンと一発シリーズ②』)
- ・内容項目【希望と勇気】

学級通信

③ 教材名 『より遠くへ～谷真美～』

- ・出典 (光村図書4年)
- ・内容項目【希望と勇気、努力と強い意志】

☆教材ならではのねらい

夢や目標をもつ時に、難しいことだからこそ挑戦してみよう思い、目標や夢を叶えるためにはできることを一つ一つやりとげながら進んでいこうとする意識を高める。

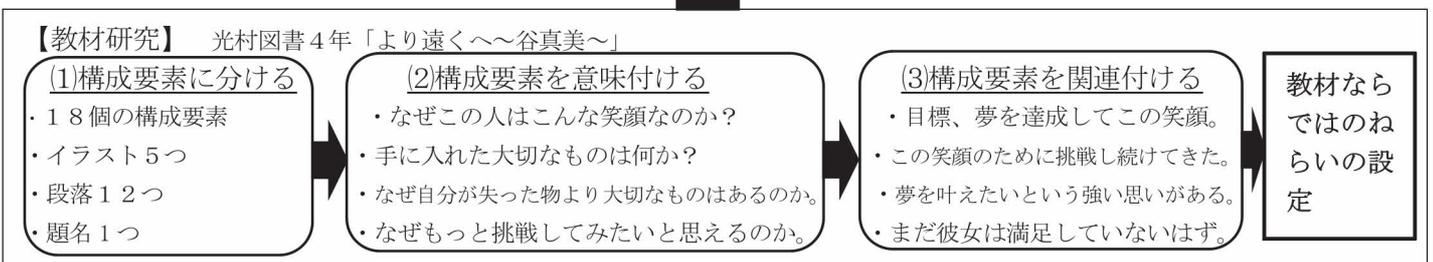
●実践後の児童の挑戦に対する認識の予想

- ・失敗してしまうのが怖い挑戦してみないと始まらない事に気付きやってみたいと思っている。
- ・得意な部分を見て自分にも人より優れている部分があることに気付くそれを伸ばそうとしている。

4-4 検証授業1 「より遠くへ～谷真美～」

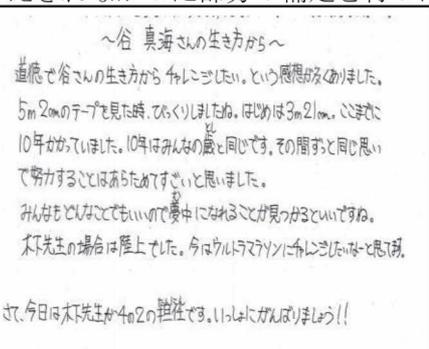
教材研究と主な授業の流れ

段階	教材の提示	主な発問と児童の反応	留意点
導入	教科書の谷真美さんの写真を提示する。 手立て(イ)-⑤	①何か気付いたこと、考えたことはありますか？ ③義足、笑顔、何かの大会中、後ろに何かある。	・写真を見て気付きを出すことで、谷さんへの関心をもてるようにする。
	笑顔が彼女のトレードマークであると伝える。	①彼女は途中で右足を失います。なぜ、こんな素晴らしい笑顔を見せているのでしょうか？	・実際の生き方と表情とのズレに気付かせ、教材への関心を高める。
展開	5m 2cmのテープを提示する。	①5mを跳ぶためにどんな事にチャレンジしていますか？③水泳、歩く、筋トレ、たくさんの練習	・5mが簡単に跳べたわけでは入事に気付けるようにする。
		①どんな思いで新しい事にチャレンジしたと思いますか？ 手立て(イ)-③ ③応援してくれる人の為、またスポーツがしたい	・失敗してしまったら、結果が出なかったらと聞き具体的にしていく。 ・夢を叶えたいと強い思いがある。
まとめ	谷さんの紹介VTRを視聴。	①谷さんは5m跳び満足しているのでしょうか。 手立て(イ)-④	・どんどん新しい事に挑戦する姿を見る。
	ふりかえり	①どんな思いをもってチャレンジしていきたいですか？	



4-5 学級通信の実際

授業後に学級通信を書かせていただき、授業後に伝えきれなかった部分の補足を行った。

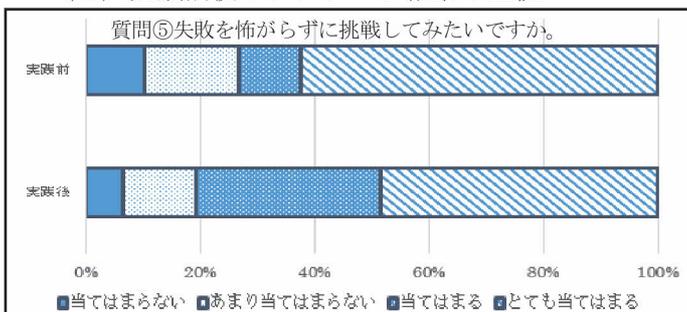


その中で、谷さんの大きな目標であった5m2cmを跳ぶのに10年かかった。それはみんなと同じ年である。というのは授業後の反省から出た内容である。

このように、授業時間で伝えきれなかった内容や、教師の内容に関連する体験談などを学級通信を使って共有することで、授業に対する認識の深まりや多角的な視点で考えるきっかけにすることができると考える。

4-6 実践の成果と考察

(1) 実践前後のアンケート結果の比較

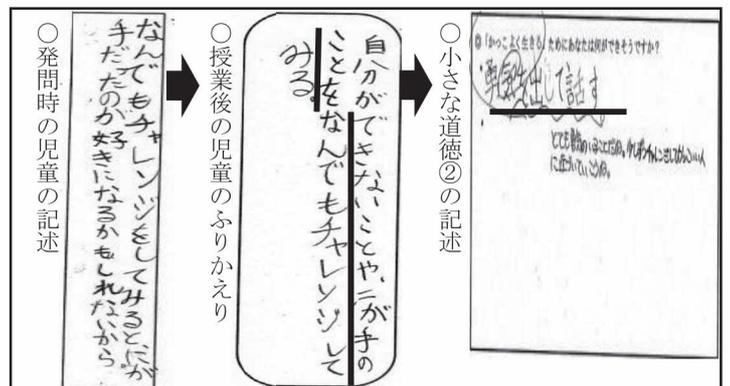


質問⑤に対して、失敗を怖がらずに挑戦したいと考える児童の割合が実践前は、とても当てはまるが62.5%であったのに対し、実践後では48.4%になった。とても当てはまると答えた児童の割合は減少してしまっていたが、当てはまるを含め肯定的に捉えている児童の割合は73.2%から80.7%に増加した。

自己肯定感に関する質問に対して、実践前後での割合の変化が少なかった。自分自身に自信をもてていないことで、挑戦することへの抵抗をまだ感じている児童がいることが分かった。

(2) 毎時間のワークシート記述分析

実践②で、「自分の持ち味を100%生かすために何ができるか」考える際に普段はあまり挙手しない児童が発言しようとしていた。結局発言はできなかったが、ワークシートには挑戦することへの意志が感じられる記述があった。



授業中に発言してみようと挑戦したができなかった経験を通して、苦手なこともチャレンジしてみたいと考えている様子がわかる。さらに、授業後の小さな道徳の記述でも、話すことに対して「勇気を出して話す」と強い意志が感じられるようになった。この児童の記述から授業同士のつながりを感じることができた。

田沼の作成した、「学習プリントの記述を活用した評価基準表」では次のような変化が見られた。

	第4段階	第3段階	第2段階	第1段階
実践①	1人	5人	10人	13人
実践②	3人	7人	16人	3人
実践③	8人	7人	8人	2人

4段階は道徳的価値を自分事として受け止め、道徳の実践意欲の見られた記述のある児童である。

道徳的実践意欲の見られる記述もパッケージの後半になるにつれて増加傾向にあることが分かる。同時に、授業で学んだ道徳的価値を含んだ記述も増加していた。

実践②では、「一人ひとり個性があるからその個性を生活で活かそうと思いました。」との記述があり、自分の個性を生かしてみたいと考えていることが分かる。さらに、この児童は、実践③では「何事にも諦めない気持ちをもってチャレンジしたい。最初から「むり」と言わずに挑戦してみる。」と記述しており、自分の弱さと向き合いながら挑戦することへの意欲の高まりが見られる記述となっている。

4-7 課題

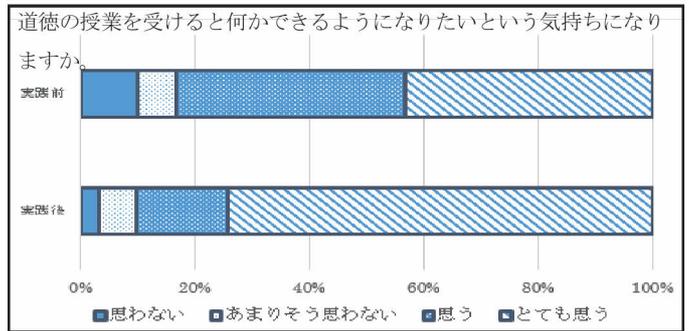
発問が児童にとって難しいものになっている部分があった。発問が不十分なものであったため、児童が教材について十分に考えることができず、認識に変容を促すことができなかった。

さらに、自己肯定感を上げるために、パッケージの構成に、自分自身に関する内容項目を小さな道徳で増やすなどして対応していく必要があった。個人での目標を設定し、自分でできることを考えた際に考えて終わってしまった。行動している姿、頑張っている姿を学級通信で全体に共有することで、他の児童の意欲にもつながったのではないかと考える。さらに、道徳の授業だけでなく他教科や活動と関連させ自己肯定感を上げる必要があった。

ワークシートの工夫を取り入れることも必要であった。1枚ポートフォリオを活用し、児童自身がユニットの中で、どのように「挑戦すること」への認識が変わっていったのかを実感できる場を設定することも必要であった。

5 本研究の成果と考察

2週間と4週間の教師力向上実習Ⅱ・Ⅲを通して、道徳的実践意欲には次のような変化がみられた。



道徳の授業を受けて何かできるようになりたい気持ちになると「とても思う」と感じている児童の割合が実習Ⅱの事前では43.3%だったが、実習Ⅲ後には74.2%に増加していた。さらに、最後の感想欄には「道徳で習ったことを将来に生かしたい」「生活に生かしたい。これからも習いたい」との記述がみられた。児童にとって道徳の時間に対して必要感をもち、生かしていきたいという認識をもつことでやがて実践力に結び付くのではないかと感じる。

実習Ⅱ・Ⅲそれぞれでパッケージを組み実践を行いそれぞれで実践意欲に対する高まりがみられた。ユニットの中でも関連させて意見を述べる児童もおり、道徳的実践意欲を高めるためにパッケージ型ユニットを活用することが有効であるといえる。

6 まとめとこれからの取り組み

実習後に「木下先生の道徳は楽しい」と多くの児童がコメントをくれた。本研究の出発点である「読むことばかりで好きじゃない」という言葉を払拭できたのではないと思う。しかし、まだまだ十分な実践意欲の育成を目指すには程遠い実践となった。今後の私自身の課題として「教材を生かす」が挙げられる。教材に何が書かれているのか、何を伝えることができるのかを読み取り、児童と一緒に考えていくことが道徳授業づくりにおいて大切な視点であると感じた。さらに、実践後の児童の姿を明確にし、教材で何を学んでいくのかを考えること、授業同士をつないで関連をもたせることは道徳科に限らずどの教科でも必要な視点ではないかと思う。

本研究で生まれた課題を解決するために、今後も継続して実践研究を行い、目の前の子どもにとってより良い学校生活を送れるよう努めていきたい。

7 参考文献

- ・小学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別な教科道
- ・田沼茂紀（2017）『パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価道徳科授業のつくり方』、東洋館出版社
- ・鈴木健二（2018）『新しい道徳授業の基礎・基本』、日本標準
- ・鈴木健二（2017）『道徳授業をおもしろくする』、教育出版
- ・鈴木健二（2016）『思考のスイッチを入れる授業の基礎・基本』、日本標準
- ・赤堀博行（2010）『道徳授業で大切なこと』、東洋館出版社
- ・栗原慎二編著（2013）『いじめ防止6時間プログラム～いじめ加害者を出さない指導～』、本の森出版
- ・島恒生（2019）『道徳教育2019・2』4-6頁、明治図書